

NEWSLETTER



James Joyce Society of Japan, April 2022

Topics

1. 第34回研究大会のご案内
2. 第34回研究大会日程とプログラム
3. 研究発表要旨
4. シンポジウム要旨
5. 新常任委員候補のお知らせ
6. 会費のお振込みについて

事務局連絡先

〒448-8542

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学 外国語教育講座
道木一弘研究室内

連絡先: joyceanjapan@gmail.com

協会ホームページ:

<https://www.joyce-society-japan.com>



Garden of Remembrance (河原真也/撮影)

1. 第34回研究大会のご案内

既にお知らせしておりますように、今年の大会は『ユリシーズ』出版百周年を記念して、2022年6月11日（土）と12日（日）の二日にわたって開催する予定です。但し、コロナ感染の状況次第では再びオンラインでの開催も考慮する必要があります。その場合はあらためてお知らせ致しますが、三年振りに対面での大会が開催できますことを心より祈っております。

プログラムとしては、初日に会員による研究発表4つ、シンポジウム1つ、記念イベントとなる二日目には、研究発表1つ、前会長の結城英雄先生による基調講演、非会員による発表2つ、最後に作家の円城塔氏を迎えて座談会を予定しております。詳しくは後掲の大会プログラムをご覧ください。

2. 第34回研究大会日程とプログラム

日時：2022年6月11日（土曜日）& 12日（日曜日）

場所：大妻女子大学千代田キャンパス

第一日目 6月11日（土曜日）9:30-17:00 本館 F-432 教室

9:30- 受付

10:00-10:10 開会の辞

会長挨拶 会長 吉川 信

10:10-10:40 研究発表(1) 質疑応答 10:40-10:50

発表者：新井智也

司会：横内一雄

発表題目：イタリア語訳者ジェイムズ・ジョイス

—*The Countess Cathleen* と *Riders to the Sea* のイタリア語訳に見る翻訳感

10:50-11:20 研究発表(2) 質疑応答 11:20-11:30

発表者：小林広直

司会：横内一雄

発表題目：エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか？

—『ユリシーズ』におけるパトリオティズム

11:30-12:00 総会

12:00-12:10 アイルランド大使挨拶（予定）

12:15-13:30 お昼休み 映画上映：Ulysses | Film

13:30-14:00 研究発表(3) 質疑応答 14:00-14:10

発表者：上條裕佳

司会：金井嘉彦

発表題目：母の願いはスティーヴンへの踏み絵

14:10-14:40 研究発表(4) 質疑応答 14:40-14:50

発表者：山田幸代

司会：金井嘉彦

発表題目：マーゲイト (Margate) はどこにあるのか？

—「海辺の少女たち (Seaside Girls)」をめぐる言説と擬態としてのモリーの語り

15:00-17:00 シンポジウム：『ユリシーズ』批評を探る

—アイルランド史とインターテクスチュアリティ

田村章（兼司会）、河原真也、平繁佳織、新名桂子

17:00- 第二日目の案内：会場の教室は異なります

第二日目：6月12日（日曜日）9:30-16:50 本館 E-055 教室

- 9:30- 受付
- 10:10-10:40 研究発表(5) 質疑応答 10:40-10:50
発表者：南谷奉良 司会：須川いずみ
発表題目：ジョイスと鞭打つ者
—『ユリシーズ』における残酷な打擲具、あるいは残忍な精神について
- 11:00-12:00 基調講演：結城英雄（前日本ジェイムズ・ジョイス協会会長）
演題：日本ジェイムズ・ジョイス協会設立と『ユリシーズ』受容
- 12:00-13:10 お昼休み 映画上映: Ulysses | Film
- 13:20-14:30 <非会員による研究発表>
- 13:20-13:40 研究発表(1) 質疑応答 13:40-13:50
発表者：福山孝子（慶応義塾大学大学院前期課程修了・ドイツ文学専攻）
司会：吉川信
発表題目：MELON と LEMON のアナグラム
- 14:00-14:20 研究発表(2) 質疑応答 14:20-14:30
発表者：武藤浩史（慶応義塾大学名誉教授・英文学専攻）
司会：吉川信
発表題目：フーコー、「自己への配慮」v. 認識論、ストア主義
—Uの語りとLBの正しさ
- 14:50-16:50 座談会：『ユリシーズ』は現代小説をどう変えた！？
桃尾美佳（司会）、下楠昌哉、田多良俊樹、ゲスト：円城塔（作家）
- 16:50 閉会の辞

事前登録をお願いいたします

今回はコロナ禍ではありますが対面での学会を開催予定のため、教室での人数制限の関係から、会員の皆様におかれましては、事前の登録をお願いしております（新規会員・一日会員・非会員の受け入れ人数に関わって参ります）。メーリングリストをご登録の方は、別途事務局よりGoogle Formをお送りいたしますが、4月30日（土）までにご回答ください。念のため、URL（短縮版）を記します：<https://onl.sc/PPvYMex>

3.研究発表要旨

イタリア語訳者ジェイムズ・ジョイス

—*The Countess Cathleen* と *Riders to the Sea* のイタリア語訳に見る翻訳観

新井智也

ジョイスはトリエステ時代、イタリア語圏にアイルランドの文学・文化・歴史を紹介する役割を担い、翻訳者としても活動した。自身の英語の生徒であった Nicolò Vidacovich による、イエイツの戯曲 *The Countess Cathleen* のイタリア語訳を手伝い、それを称賛したうえでその出版のためにイエイツに掛け合った。さらに、シングの戯曲 *Riders to the Sea* を Vidacovich とイタリア語に共訳した。本発表では、イタリア語訳者としてのジョイスについて論じる。

まずは、ジョイスが否定的見解を示した、Carlo Linati による *The Countess Cathleen* のイタリア語訳との対比を意識しつつ、Vidacovich によるこの劇の翻訳とそれに対するジョイスの評言から、この作家にとって優れた翻訳とはどのようなものであったかを考える。そのうえで、ジョイスが関与した二つの劇の翻訳において、どのようなイタリア語表現が用いられているかを分析する。後に Nino Frank らの協力を得て行うことになる、*Finnegans Wake* の断章のイタリア語への自己翻訳については、標準語的とする見方とトリエステ方言的という見方が提示されている。そこで、ジョイスがそれ以前に携わった英語作品のイタリア語訳において、どのような言語的特徴が見られるかを、特にアイルランド文学特有の語彙や表現がどのようなイタリア語表現に移されているかという点に着目しながら明らかにしていく。

イエイツの劇の翻訳では、豊富な語彙を用いてニュアンスの異なる言葉を訳し分けるという方策が採られている一方、シングの劇の方は、標準語の範疇に入る限られた語彙を利用しつつ、様々な構文上の工夫で原文の特徴的な表現に対応しているという特徴が見られる。このような二つの翻訳の分析を通して、ジョイスがどのような翻訳観を持っていたか、また『ユリシーズ』第16挿話ではイタリア語訳を二人の主人公の対立軸の一つにした彼自身はこの言語をどう捉えていたか、といった問題について考えていきたい。

エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか？

—『ユリシーズ』におけるパトリオティズム

小林広直

『ユリシーズ』第15挿話末尾でエピファニー的に描かれるスティーヴンとブルームの〈象徴的父子〉関係は、続く第16挿話において年長者のブルームが食べることや働くことなど、「常識」の意義を説くことによって強化される。酔いと疲労のせいもありほとんど話を聞いていないスティーヴンだが、文筆業と農業に携わる者の「どちらもアイルランドに属しているんだから」と述べるブルームに対し、彼は「アイルランドが大事なものは、それが僕に属しているからですよ」と言い放つ。Jean-Michel Rabaté が指摘するように、ジョイスは単なる利己主義であるところの *egotism* を批判し、あくまでも個人主義に根差した確たる自己を創り出すという意味で *egoism* の信奉者であったということは事実であるとしても、国家全体を己一人に従属させるかのようなスティーヴンの物言いは、まさに若気の至りと言うべき実に傲岸なものだろう。この国家と個人という大きな主題を巡る対話は

「私たちには国は変えられませんから、話題を変えましょう」というスティーヴンの言葉によって即座に中断されてしまうが、1907年の「アイルランド、聖人と賢人の島」で既に「国家がエゴを持つのは、個々人の場合と全く同じである」記したジョイスにとって、第16挿話で明示的に描かれることのない国家と個人の関係は、おそらく読者自身が読み取るべき問題なのだろう。

ジョイスとナショナリズムの関係は従来盛んに論じられてきたが、“nationalism”という言葉はジョイス自身『ユリシーズ』の中で一度も使っておらず、代わりに彼は“patriotism”という言葉は三度、いずれもブルームの台詞の中で使用している。1902年の書評「あるアイルランド詩人」では、“patriotism”は「文学という芸術」においては無用であるとあり、『ユリシーズ』出版の1922年に至るおよそ20年の間に、ジョイスの愛国心に対する考えの変遷を見て取ることもできるのではないか。本発表では、20代前半の若きジョイス／スティーヴンが未だ気づかず、30代後半のジョイス／ブルームが「意識的な個人の生活から得られた」patriotismの問題を再検討したい。

母の願いはスティーヴンへの踏絵 上條裕佳

『若い芸術家の肖像』でスティーヴン・デダラスは、復活祭のとき聖体を拝領するようにという母の願いを拒否した。また『ユリシーズ』では、臨終間際の母の願いである祈りを拒否した。これらの拒否について友人のクランリーやマリガンから、何でもないことだから叶えてやればよかったのに、と非難される。母の願いを拒否した彼の葛藤について E. H. エリクソン(E. H. Erikson)の「アイデンティティ」の概念を通して考察を述べる。

エリクソン(1902年-1994年)は、アメリカ合衆国の精神分析家で、フロイトの娘アンナ・フロイトのもとで精神分析を学び、社会・文化・歴史的状況との相互作用が人間の行動や性格を規定すると主張した。そして、ライフ・サイクル理論の中で人間の生涯を8つの時期に区分けして、各々の時期の課題を論じた。青年期の課題が「アイデンティティの形成」で、その過程で社会から容認され易い「忠誠」という人間的強さが現れる。一方で社会から容認され難い「役割拒否」という特性も現れる。しかし、エリクソンは役割拒否の必要性も次のように述べている「アイデンティティの形成はある程度の役割拒否なしには不可能である。身近にある諸役割が、若者個人のアイデンティティの統合の可能性を脅かすところでは特にそうである」。そして、彼の著書『青年ルター』でマルティン・ルターについてアイデンティティの視点で論じている。スティーヴンにとって、冒頭で紹介した母の願いを叶えることは彼の芸術家としてのアイデンティティの形成を脅かすことを意味する。彼はカトリックの信仰を捨てて芸術家になるため、母の願いという踏絵を踏んでしまったのである。

エリクソンは、ジョージ・バーナード・ショウの自伝的記述を抜粋しながらアイデンティティの形成について述べている。発表ではショウと比較しながらスティーヴンのアイデンティティ形成についても述べる。

「マーゲイト (Margate)」はどこにあるのか？

— 「海辺の少女たち (Seaside Girls)」をめぐる言説と擬態としてのモリーの語り

山田幸代

Ulysses (1922) 第18挿話において Molly Bloom は、夫 Leopold が自宅に連れてきた Stephen Dedalus との情事を想像しながら、かつて“Margate”の海水浴場で見た“those fine young men”について考える (U18.1345-49)。ここで言及される「マーゲイト」という地名がどこを指すかについては、これまで研究者の間でも意見が分かれている。Don Gifford の注釈 *Ulysses Annotated* (1988) には「スペイン本土からジブラルタルを隔てる地峡の東側」にある海水浴場であると説明されており (Gifford 630)、この解釈は他書でも採用されている。いっぽう Phillip Herring は 1979 年に、「マーゲイト」と言えば一般的にイギリスの代表的なシーサイド・リゾートの一つであるというのが共通認識であり、これはモリーがジブラルタルから移動する船から見たか、過去に行ったイングランド東部の海水浴場を思い出しているのだと解釈している (Herring 515)。

本発表はこうした解釈に加えて、歌手であるモリーが言及するこの「マーゲイト」にはポピュラーソング“Seaside Girls”の歌詞にある地名が含意されているという、もう一つの可能性を提示する。19世紀から20世紀初頭にかけてダブリンで流行したこのヒットソングは『ユリシーズ』の中で複数の箇所において言及されており、当時のジェンダー観を如実に示す表象となっている。また 1990 年代には Thomas Richards や Garry M. Leonard などによる文化研究を通して、この歌が『ユリシーズ』の中で果たす役割の重要性も指摘されてきた。さらにこうした先行研究とともに *Molly Blooms* (1994) において Kimberly J. Devlin が指摘する“Mimicry” (擬態) としてのモリーの語りの分析などを踏まえて、このテキストの解釈について再考してみたい。

ジョイスと鞭打つ者

— 『ユリシーズ』における残酷な打擲具、あるいは残忍な精神について

南谷奉良

Ulysses (1922) の物語には、鞭打つ者 (flagellant) とその打擲行為が数多く描かれる。例えば、サーカスで酷使される少女へと向けられるサディスティックな鞭打ち行為、小枝や鞭で叩くことを通じて動物を調教・制御する行為、(その名にも表れているように) James Lovebitch の *Fair Tyrant* や(後のマゾヒズム幻想の素材を多く提供している) Leopold von Sacher-Masoch の *Venus in Furs* 等のエロティカに描かれる性技としての鞭打ち、また英国海軍やコンゴ自由国での刑罰や笞刑などがある。これらの行為はそれぞれ性質を違えてはいるが、「テキストの記憶」(John S. Rikard) が再形成される第15挿話において、“flagellation”という集合のなかに収められる。すなわち、同挿話の幻想空間において姿形を変えて登場するさまざまな残酷な打擲具——結び目のついた革鞭、灼熱のバール、鞭打ち用の柱、樺の枝鞭、九尾の猫鞭、狩猟用の鞭、鉄釘付きの棍棒、足裏に打擲を加える杖、革紐鞭、犬鞭、御者鞭——となって、支配と服従をめぐる関係性を規定するために振りかざされる、一つの身振りのイメージを形成する。注目すべきことに、*Dubliners* (1914) と *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) とは異なり、*Ulysses* に登場する鞭打ちは、痛みへの恐怖心や痛みを受けた当の人物の主観的な情動体験のリアリティを積極的に顕在化させることはなく、むしろ快樂へ転移する可能性を仄めかしながら、対象の残酷な性質や残忍な性質を輪郭づけることが多い。本発表では、そのようにして *Ulysses* が鞭打ちという行為への関心を「痛み」から「残酷さ」へとシフトさせた理由を、19世紀から20世紀初頭にかけて各所で生じた anti-flagellation の機運と合わせて論じ、先行する二作の小説作品とは異なる様相とフェーズ展開を考察する。

3. シンポジウム要旨

『ユリシーズ』批評を探る ——アイルランド史とインターテクスチュアリティ 田村章（兼司会）、河原真也、平繁佳織、新名桂子

近年の『ユリシーズ』研究で目立つものには、アイルランド史との関わりをテーマにしたものと、インターテクスチュアリティを取りあげたものがある。舞台となる20世紀初頭のアイルランドをめぐる、政治的・社会的背景や文化的背景にかんする多様な歴史的研究がなされている。また、『ユリシーズ』のテキストについて、古典文学、英文学のみならず、イタリア、フランス等、ヨーロッパの文学テキストとの関係も指摘されている。こうした研究は従来あまり注目されなかったテキストの細部に光をあて、新たな解釈を導きだしてきた。ただし、問題がなかったわけではない。細部にこだわるほど、解釈が新しいほど、研究の土台の共有が困難になり、評価しづらくなる危険もはらんでいた。初学者にとって、このことは研究の意義を見えにくくしたり、ハードルを高くする一因にもなったように思われる。

このシンポジウムでは、『ユリシーズ』におけるアイルランド史とインターテクスチュアリティにかんする研究について、専門用語や研究史など基本事項の確認も含めておきたい。その上で、各パネリストが、それぞれの関心に沿って、研究成果を発表する。この中で、これまで研究の前提として当然視されていたことが、もはやそうではないという事態を目の当たりにするかもしれない。フロアとの議論を活発にしたいと考えている。積極的なご参加をお願いしたい。ご参考に各発表の要旨末尾に基本文献を一つずつ掲げておく。

歴史とは悪夢なのか ——『ユリシーズ』をめぐるアイルランド史の再検証 河原真也

『ユリシーズ』が出版された1922年にアイルランド自由国が成立するが、その年の6月に内戦が勃発したことは見逃されがちだ。英国との関係において立場を異にする両派は、共和国成立後もFianna Fáil（共和党）とFine Gael（統一アイルランド党）という2大政党へと受け継がれ、両者が融和するに至ったのは連立政権が樹立した2020年のことである。英国からの自立後、実に100年間もアイルランド人が分断していたことは「語られない真実」と言えよう。『ユリシーズ』においても、過激なナショナリズムを信仰する「市民」はまさしく一方の極に存在するものとして、またもう一方には（カトリックに改宗した）ブルームのような平和主義的なアイルランド人の存在が描きだされている。20世紀前半のアイルランドを考えるうえで、プロテスタント／カトリックという二項対立で英愛関係をとらえられがちだが、アイルランド史を紐解けばプロテスタントやカトリックがそれぞれ一枚岩ではなかったことがわかる。

これまで歴史について扱ったジョイス研究が多数世に出たが、本発表ではまずはその概観を辿る。そのうえで、ジョイス研究とアイルランド史との関係性がアイルランドの政情に左右されてきたことを確認したい。そして*Freeman's Journal*や*Thom's Directory*、*Annual Register*などの一次資料をもとに、1904年前後から1922年

前後までのアイルランドの状況を複数の視点に基づき精査し、それらを作品中の描写と関連させながら一考察を加える。具体的に対象とするのは、1798 Rebellion や直接的言及のない Easter Rising などの歴史的事件、ミルク売りの老婆、ディージー校長、“the onelegged sailor”などの登場人物、さらには当時のアイルランドが抱えていた社会問題などとし、これらの再検証によって新たな解釈を提示してみたい。

基本文献: Potts, Willard. *Joyce and Two Irelands*. U of Texas P, 2000.

『ユリシーズ』と文芸復興運動、再考

平繁佳織

『ユリシーズ』がモダニズム文学の金字塔であることに異論を唱える者は少ないだろう。それゆえ、20世紀になって長らく支配的であったインターナショナル・モダニズム対アイルランド文芸復興運動（あるいはナショナリズム）という構図は、ジョイスという作家をアイルランドの文脈から遠ざけてきた。ジョイスがアイルランドの作家として上書きされるのは、80年代後半にモダニズム批評に歴史を持ち込んだ、いわゆるニュー・モダニスト・スタディーズや、*Field Day Anthology of Irish Writing* (1992, 2002)の出版に代表されるポストコロニアル批評の高まりを経てからである。イーマ・ノーランやレン・プラットらジョイス研究者によって『ユリシーズ』という作品も文芸復興運動との関係で論じられるようになったものの、ジョイス自身が運動への懐疑心を声高に表明したこともあり、文芸復興運動の主要テキストに『ユリシーズ』を含めたジョイスの作品が名を連ねることは稀である。しかし、近年の文芸復興運動に関する論考を紐解くと、ジョイスの名前や作品が全く出てこないことも、同様に稀であると気がつくだろう。そこで、本発表では近頃もてはやされているアイリッシュ・モダニズムという概念を用いて、『ユリシーズ』と文芸復興運動の関係を再検討したい。アイリッシュ・モダニズムとは、いわばナショナルとインターナショナルという相反する引力を内包する撞着的用語で、2000年代になって急速に形を成した分野である。モダニズムにアイルランド特有の文化的・歴史的特徴を読み取るこの新たな潮流によって、文学におけるモダニズムと復興運動との距離は未だかつてないほどに近づいている。出版から100年が経過したいま、アイリッシュ・モダニズムを経由することで、『ユリシーズ』を文芸復興運動の文脈にどこまで引きよせることができるのか検討する。

基本文献: Platt, Len. *Joyce and the Anglo-Irish: A Study of Joyce and the Literary Revival*. Rodopi, 1998.

インターテクスチュアリティ研究の概観と「ホメリック・パラレル」の再評価

田村 章

『ユリシーズ』のテキストは典型的な「引用の織物」である。比較的シンプルな第4挿話を取り上げてみても、ホメロスの『オデュッセイア』、聖書に加えて、エイミー・リードの *Ruby. A Novel. Founded on the Life of a Circus Girl*、コールリッジの“Kubla Khan”、イギリスの伝承童謡、など様々なテキストとの関わりが指摘されている。『ユリシーズ』のインターテクスチュアリティ研究は、英文学だけでもチョーサーの『カンタベリー物語』からジョイスとほぼ同時代のジョージ・ムアやベケットまで及んでおり、数々のテキストを対象に研究者がしのぎを削る場となっている。オンライン版 *OED* によると、“intertextuality”はクリステヴァによる造語で1967年

に *Critique* 誌に初めて現れた。現在この語は、“allusion,” “echo,” “influence”等に代わって用いられることも多い。

『オデュッセイア』は『ユリシーズ』のインターテクチュアリティを論じる際に、基本となる古典である。両作品の照応関係（「ホメリック・パラレル」）について、スチュアート・ギルバートの有名な著書は、現在も読解の手引きとなっている。しかしながら、同書について数々の指摘や批判があった。リチャード・エルマンによる『ジェイズム・ジョイス伝』には、同書は「ジョイスの考えの正確な公式化ではなく、その鋭い解釈となっている」と記されている。リチャード・カインは、同書はホメロスとの照応関係を強調しすぎだと批判する。

本発表では、『ユリシーズ』のインターテクスチュアリティ研究の流れを概観するとともに、研究のあり方について、「ホメリック・パラレル」の再評価をとおして考えてみたい。

基本文献: Gilbert, Stuart. *James Joyce's "Ulysses": A Study*. Faber and Faber, 1960.

『ユリシーズ』を楽しく読むために
——ジョイス、フローベール、パロディ
新名桂子

「僕は沢山の謎とパズルを仕込んだので、何世紀もの間、大学の教授たちがその答えを探すのに忙しいことだろう。それが不滅性を確保する唯一の方法なんだ」(Richard Ellmann, *James Joyce*, 1982, p. 521)——ジョイスが『ユリシーズ』のフランス語への翻訳者ブノワ＝メシヤンに言ったとされるこの言葉は『ユリシーズ』のテクスト性を見事に表現している。本発表では、ジョイスの仕掛けた「謎とパズル」の答えが分かると『ユリシーズ』がどのように深く、また楽しく読めるかを示したい。

『ユリシーズ』は、『オデュッセイア』のパロディと言われ、ジョイス自身が創作の計画表を示してそれを証明しているくらいだが、実は、『オデュッセイア』以外にも多くの原テキストがある。その中でも大変重要なものがフローベールの文学である。しかし、ジョイス文学とフローベール文学の関係性への研究者の関心は、例えば『ユリシーズ』と『オデュッセイア』の関係性への関心に比べると永らく控えめなものであった。それが、スカーレット・バロンの精緻で包括的な研究 *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality* (2012)によって変わってきている。この流れの中で、まず、ジョイス文学とフローベール文学の関係性に関わるこれまでの研究を概観し、この分野の研究がその重要性にもかかわらず、やや立ち遅れてきた理由を考察する。次に、『ユリシーズ』が多くの原テキストを持つパロディ文学であり、重要な原テキストの一つが『ボヴァリー夫人』であることを説明する。最後に、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディと分かれば、どのように謎が解けて深く楽しく読めるかを論じる。

基本文献: Baron, Scarlett. *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality*. Oxford UP, 2012.

5. 新常任委員候補のお知らせ

常任委員の改選を踏まえ、昨年10月末から11月20日まで投票、11月28日名古屋鶴舞公園講堂地下カフェで開票を行いました。新しい常任委員候補は以下の9名の方々です。

金井嘉彦、河原真也、吉川信、下楠昌哉、須川いずみ、桃尾美佳、横内一雄、道木一弘、田多良俊樹

開票立会人：田村章、道木一弘、山田幸代

尚、新常任委員は今年6月の大会総会での承認を待って、正式に決定する予定です。また、会長より新しい事務局長に、横内一雄氏が指名されました。6月大会をもって道木と交代する予定です。

5. 会費のお振込みについて

会費は協会の口座へのお振込みをお願い致します（大会会場での支払いはできません）。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担頂いております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、振込先が異なりますのでご注意ください。

一般会員・・・5,000円 学生会員・・・3,500円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
口座番号（記号）10430
番号 1854541

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900 店番号：048
預金種目：普通
店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）
口座番号：0185454

■所属学部・短大・大学院

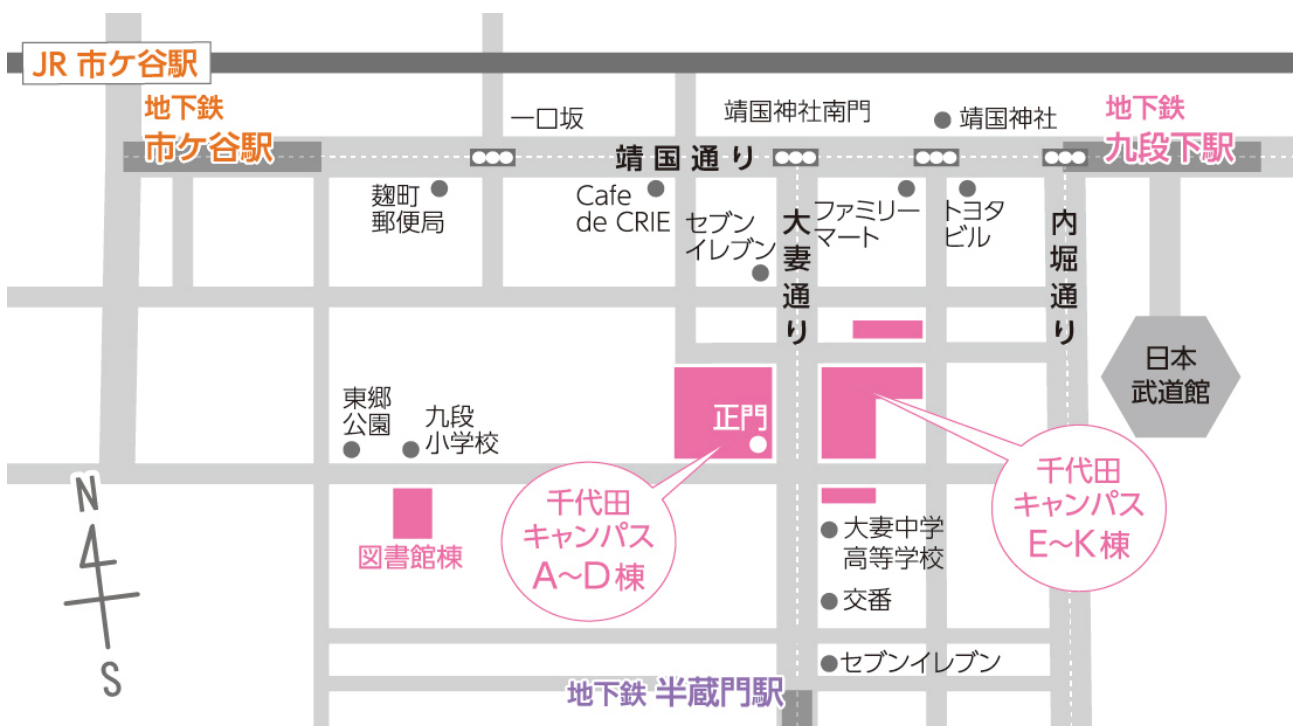
家政学部、文学部、社会情報学部、比較文化学部、短期大学部
人間文化研究科（大学院）[人間生活科学専攻 言語文化学専攻]

■所在地

〒102-8357 東京都千代田区三番町 12 番地
TEL : 03-5275-6011

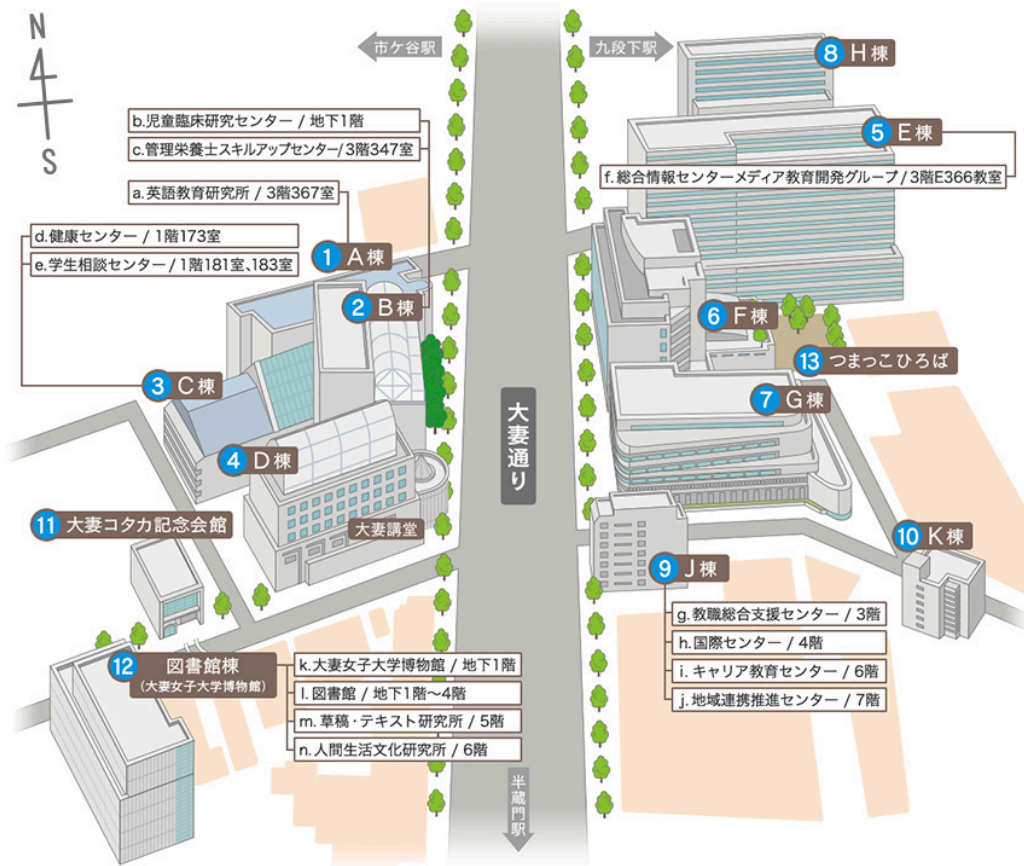
■駅からの所要時間

- ・ JR 総武線「市ヶ谷駅」下車 徒歩 10 分
- ・ 都営新宿線、東京メトロ有楽町線・南北線
「市ヶ谷駅」下車（A3 出口） 徒歩 7 分
- ・ 東京メトロ半蔵門線「半蔵門駅」下車（5 番出口） 徒歩 5 分
- ・ 東京メトロ東西線「九段下駅」下車（2 番出口） 徒歩 12 分



*E棟とF棟はL字型で繋がっています。F棟正面玄関（次図では大妻通りに面したE棟寄り）からお入りください（ジョイス協会）

千代田キャンパスマップ



① 大学校舎A棟

- a. 英語教育研究所 3階367室
- 設備：購買部、LOUNGE RYOMA

② 大学校舎B棟

- b. 児童臨床研究センター 地下1階
- c. 管理栄養士スキルアップセンター 3階347室
- 設備：食物系実習室、化学分析系実験室、被服系実習室、情報処理教室

③ 大学校舎C棟

- d. 健康センター 1階173室
- e. 学生相談センター 1階181室、183室
- 設備：学生食堂 KOTAKA KITCHEN (コタカキッチン)、アトリウム、情報処理教室

④ 大学校舎D棟

- 設備：大妻講堂

⑤ 本館E棟

- f. 総合情報センターメディア教育開発グループ 3階366室
- 設備：文系共同図書室、情報処理教室、エスカレーター一、エスカレーターホールラウンジ

⑥ 本館F棟

- 設備：学生食堂 kotacafé、食物系実習室、化学分析系実験室、被服系実習室、8階(屋上)テラス、コミュニティテラス

⑦ 大学校舎G棟

- 設備：kotacafé annex、アクティブラウンジ

⑧ 大学校舎H棟

- 設備：情報処理教室

⑨ 大学校舎別館(J棟)

- g. 教職総合支援センター 3階
- h. 国際センター 4階
- i. キャリア教育センター 6階
- j. 地域連携推進センター 7階

⑩ 大学校舎K棟

- 設備：茶室

⑪ 大妻コタカ記念会館

⑫ 図書館棟

- k. 大妻女子大学博物館 地下1階
- l. 図書館 地下1階～4階
- m. 草稿・テキスト研究所 5階
- n. 人間生活文化研究所 6階

⑬ つまっこひろば